

外国語

1 外国語はどのようなことに重点を置いて改善されるのか。

(1) 改訂の趣旨

- 互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動を重視する。
- 具体的な課題等を設定するなどして、学習した語彙・表現などを実際に活用する活動を充実させ、言語活動の実質化を図る。

(2) 改訂の要点

ア 目標の改善

- 「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力を明確にした上で、
 - ① 各学校段階の学びを接続させる
 - ② 「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にするという観点から、国際的な基準などを参考に、小・中・高等学校で一貫した、領域別の目標が設定されている。
- 聞くこと、読むこと、話すこと[やり取り]、話すこと[発表]、書くことの五つの領域において英語の目標が設定されている。

イ 内容構成の改善

- 育成を目指す資質・能力を確実に身に付けられるよう、
 - ① 「知識及び技能」として「英語の特徴等に関する事項」〔第2の2(1)〕
 - ② 「思考力・判断力・表現力等」として「情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項」〔第2の2(2)〕が整理された上で、
 - ③ 「言語活動及び言語の働きに関する事項」〔第2の2(3)〕に、「知識及び技能」を活用して「思考力・判断力・表現力等」を身に付けるための具体的な言語活動、言語の働き等が整理され、「知識及び技能」に示す事項を活用して、言語活動を通して「思考力、判断力、表現力等」を指導することとされた。

ウ 内容の改善・充実

- 語彙については、五つの領域別の目標を達成するための言語活動に必要となる、小学校で学習した600～700語に「1600～1800語程度の新語を加えた語」とされた。
- 文、文構造及び文法事項について、表現をより適切でより豊かにするなどの目的で「感嘆文のうち基本的なもの」、「現在完了進行形」などが追加された。

エ 学習指導の改善・充実

- 小・中学校の学びを接続するため、指導計画の作成に当たっては、語彙、表現などを異なる場面の中で繰り返し活用することによって、生徒が自分の考えなどを表現する力を高めることなどが明記された。
- 授業は英語で行うことを基本とすることが新たに規定された。

オ 主体的・対話的で深い学びの実現

- 3の指導計画の作成と内容の取扱い(1)アに「生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること」が明記された。
- 英語科における学びの深まりの鍵となるのが「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」となる。

2 外国語の目標はどのように変わるのか。

【第2章第1節 外国語科の目標】

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと、言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方

外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること

外国語によるコミュニケーションの一連の過程を通して、このような「見方・考え方」を働かせながら、自分の思いや考えを表現することなどを通じて、生徒の発達の段階に応じて「見方・考え方」を豊かにすることが重要である。

(2) 簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力

外国語科の目標の中心となる部分で、その資質・能力は、「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で詳細な目標として明確に設定されている。

〔知識及び技能〕第1目標(1)

外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。

ここでは「生きて働く『知識・技能』の習得」が重視されている。「(外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを)理解する」とは、基礎的・基本的な知識を確実に習得しながら、既存の知識と関連付けたり組み合わせたりしていきることにより、学習内容の深い理解と個別の知識の定着を図るとともに、社会における様々な場面で活用できる概念としていくことである。

また、「(聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて)活用できる技能を身に付ける」とは、一定の手順や段階を迫って身に付く個別の技能のみならず、獲得した個別の技能が自分の経験やほかの技能と関連付けられ、変化する状況や課題に応じて主体的に活用できる技能として習熟・熟達していくということである。

〔思考力、判断力、表現力等〕第1目標(2)

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。

「思考力、判断力、表現力等」の育成のためには、外国語を実際に使用することが不可欠である。外国語教育の特性として「コミュニケーションを行う目的や場面、状況など」を設定し、生徒が理解し、外国語で表現し伝え合う力を育成するための学習過程の改善・充実を図る必要がある。

〔学びに向かう力、人間性等〕第1目標(3)

外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

「知識及び技能」及び「思考力、判断力、表現力等」と「学びに向かう力、人間性等」は不可分に結びついている。生徒が興味をもって取り組むことができる言語活動を易しいものから段階的に取り入れたり、自己表現活動の工夫をしたりするなど、様々な手立てを通じて生徒の主体的に学習に取り組む態度の育成を目指した指導が大切である。

また、「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」とは、単に授業等において積極的に外国語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度のみならず、学校教育外においても、生涯にわたって継続して外国語習得に取り組もうとするといった態度を養うことを目標としている。

【第2章第2節 英語の目標】

英語学習の特質を踏まえ、以下に示す、聞くこと、読むこと、話すこと〔やり取り〕、話すこと〔発表〕、書くことの五つの領域別に設定する目標の実現を目指した指導を通して、第1の(1)及び(2)に示す資質・能力を一体的に育成するとともに、その過程を通して、第1の(3)に示す資質・能力を育成する。

小学校段階から発達段階に応じて、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと〔やり取り〕」、「話すこと〔発表〕」、「書くこと」の五つの領域ごとに、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」を一体的に育成する目標が設定されている。

各学校において作成される学習到達目標は、五つの領域別の目標を踏まえながら、第2の2に記述された、より具体的な言語材料と言語活動を統合して設定されることが望ましい。同一の学習到達目標について、複数の単元で異なる言語材料を活用した異なる言語活動を行うことにより、五つの領域別の目標をよりよく達成できるようなカリキュラム・マネジメントや課題設定が望まれる。

3 内容はどのように変わるのか。

(1) 英語の特徴やきまりに関する事項〔知識及び技能〕

ア 音声

小学校の外国語科における取扱いを踏まえて指導を行う。

イ 符号

小学校の外国語科において、文字並びに基本的な符号が取り扱われていることを踏まえる。文字については、アルファベットの活字体の大文字と小文字を書くことができるように引き続き指導するとともに、符号については、その意味や使い方を理解し、コミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けさせる。

ウ 語、連語及び慣用表現

小学校で学習した語に1600～1800語程度の新語を加えた語を指導する。語彙には、受容語彙と発信語彙とがあり、全てを生徒が発信できるようにすることが求められているわけではないことに留意する。言語活動において繰り返し活用することにより、自分の考えなどを表現する際にそれらを活用し、表現できるような段階まで確実に定着させるようにする。連語については、小学校でも扱われていることに留意し、「読むこと」や「書くこと」の言語活動の中で活用できるように指導したり、重文や複文など複雑な文や文構造の中で用いることができるように指導したりする。

エ 追加、新設された文、文構造及び文法事項

○ 文

「感嘆文のうち基本的なもの」

○ 文構造

- ・ 主語＋動詞＋間接目的語＋ that で始まる節／ what など始まる節
- ・ 主語＋動詞＋目的語＋原形不定詞
- ・ 主語＋ be 動詞＋形容詞＋ that で始まる節

○ 文法事項

「接続詞」、「助動詞」、「前置詞」、「現在完了進行形」、「仮定法のうち基本的なもの」

(2) 情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項〔思考力、判断力、表現力等〕

- ・ アについては、コミュニケーションの目的や場面、状況などに応じて聞き取ったり読み取ったりすべきことを判断し、理解した情報を整理したり、吟味したり、既にもっている知識と照らし合わせて関連付けたりして、必要な情報や考えなどを理解するために指導する内容の焦点化を図り、指導方法を工夫する。
- ・ イについては、統合的な言語使用の中で、得られた情報や表現を整理・吟味し、表現するために活用することにより、五つの領域が密接に結び付いた英語使用ができるような力を育成する。

- ・ ウについては、情報や考えを一方向的に伝えるのではなく、相手が話したり書いたりした内容にも十分に注意を傾けながらやり取りをし、お互いの理解を深められるようにしていく。十分な準備をした上での言語活動の他に、メモ書きなどの補助を利用しつつ、即興で話したり書いたりする活動を行い、相手からフィードバックを受けたり、同じタスクを複数回繰り返しながら学びを深めていく言語活動を行う。書く際にも、推敲を重ねる中で、徐々に伝える内容を整理していくようにする。

(3) 言語活動及び言語の働きに関する事項

○ 言語活動に関する事項

ア 小学校学習指導要領第2章第10節外国語の第2の2の(3)に示す言語活動のうち、小学校における学習内容の定着を図るために必要なもの。

生徒の実態を踏まえながら、初年次の導入段階から必要な言語活動を通じた学習を繰り返し行い、小学校からの学びを接続させる。併せて、小学校で指導された簡単な語句及び基本的な表現や、文字の認識、語順の違いなどへの気付き等に関して指導された内容を、言語活動において繰り返し活用することにより、自分の考えなどを表現する際にそれらを活用し、表現できるような段階まで確実に定着させる。

また、言語活動を行う際は、生徒が言語活動の目的や言語の使用場面を意識して行うことができるよう、具体的な課題等を設定し、その目的を達成するために、必要な言語材料を取捨選択して活用できるようにするとともに、このような言語活動を通じて、生徒の「学びに向かう力、人間性等」を育成する。

イ 聞くこと

(ア)に示す事項は、「聞くこと」の全ての目標に関連していることに留意する。

(イ)については、聞く際の状況や目的を明示して、どのような情報が必要かを考えさせた上で、その部分に集中して聞き取る活動を行わせる。

(ウ)については、話し手からの働き掛けに対する反応の仕方が、場面や状況、聞き手によって様々であることを踏まえ、様々な活動を行わせ、どのような応答があり得るか考えさせる。また、やり取りを伴う応答も指導する。

(エ)については、聞いた内容をどのように話すことや書くことにつなげるのかに留意する。ただし、この活動での「話すこと」や「書くこと」においては、「話すこと」や「書くこと」の活動に対するつまずきを極力軽減する配慮をする。

ウ 読むこと

(ア)については、書かれた文章の本来の目的を確認した上で、音読することがふさわしいのか、ふさわしいとすればその音読はどのような目的で行われるのかを明確に意識する。

(イ)については、できるだけ現実に近い場面を設定するとともに、逐語的な読みから脱却し、自分が必要とする情報を捉えさせるようにする。小学校の外国語科の「読むこと」の言語活動を発展させたものであることを踏まえ、生徒の実態を把握して指導に当たるよう留意する。

(ウ)の指導に当たっては、レベルに合ったまとまりのある文章を最初から最後まで通して読む機会をできるだけたくさん設定する。逐語的な読みから脱却し、意味のまとまりごとに英文を捉えさせる。また、これらの活動を取り入れる際には、読み取れたことについて考えを交流するなど、学習形態の工夫をする。

(エ)の指導に当たっては、文章全体としての構成や論理の展開を押さえさせた上で、目的に応じて要点を把握させる。その際、収集・整理した複数の情報を取り出して総合的に判断し、内容に対する感想や賛否、自分の考えなどを話したり書いたりして表現するなど、領域間の統合的な言語活動を工夫するようにする。

エ 話すこと [やり取り]

(ア)については、既習事項等の活用や、伝え合う活動を継続的にを行い、言いたい

ことを即興で表現できる範囲を徐々に拡大していく。その際、会話を継続する力が習慣的に身に付くようにする。また、指導の重点を内容の伝達に置きながら、言語使用について具体的にフィードバックしたり、活動後に使用した英語について振り返り、場面に応じた適切な表現方法を確認する機会を与えたりする。

(イ)の指導に当たっては、生徒の実態や習熟の程度を考慮し、考えを整理するための時間を設定したり、作成する「メモ」の条件を適切に示したりするなど、計画的に指導していく。

(ウ)については、聞いたり読んだりして得られた事実や情報をやり取りのきっかけとし、自分の経験などと結び付けたりしながら言語活動を行う。その際、生徒の実態に応じて段階的に進めるとともに、多様な考え方が生かされるようにする。

オ 話すこと [発表]

(ア)では、一度説明した後で、よりよい説明の仕方や表現について振り返らせたり、モデルの説明を聞き、効果的な説明の仕方を確認したりした後で、類似した話題や事柄を取り上げ、再度口頭で説明する活動に取り組みさせるなどの工夫も行う。その際、初めから正確さを求めたり、必要な表現を練習したりしてから行うのではなく、伝える内容に重点を置きながら、生徒の多様な発話を促し、その様子を見て必要に応じて適切な語彙や表現などを助言する。

(イ)の活動は、スピーチをする目的を明確にする。また、伝えたい事実や考えなどの順番を考えたり、テーマに沿った展開になっているかを確認したりする。考えを整理する時間を取るとともに、聞き手に配慮したスピーチになるように指導する。さらに、コミュニケーションとしてのスピーチとなるよう留意する。

(ウ)の活動では、メモの取り方を指導するとともに、「口頭で要約」する言語活動では、生徒一人一人の興味・関心や考えに応じて焦点を当てたい部分を選択してまとめたり、聞いたり読んだりする英文を分担したりなどすることにより、英語を聞く必要性や意味がもてるような活動にすることにも留意する。また、自分の考えや気持ちなどを述べる際には、理由を考えさせたり、生徒の発話に対して教師が理由を尋ねたりする活動も継続的に行う。さらに、発表の内容や様子を振り返る機会を設け、適切なフィードバックにより、生徒自身が新たな課題を把握し、考えたり感じたりしたことをより適切に表現できるようにする。

カ 書くこと

(ア)については、「話すこと」と「書くこと」の順序についてバランスをとりながら指導に当たる。書く活動を行う前には、書き方を学ばせた上で、その後に自分の力で書くことができるようにするといった段階を踏む。慣れ親しんだ語句や表現を用いて、書き方の規則や語順を意識させるとともに、個の習熟度に応じた指導を行う。また、学習集団全体に共通する誤りについては、機会を捉えて説明し直すなどの手立てを通して、徐々に正確に書けるように指導する。

(イ)については、関心の高い身近な話題や生徒の体験などと関連付けて扱うなどして、意欲的に書く機会を増やす工夫を行う。また、様々な形式により、自分の考えや気持ちなどが伝わるように文章を書くために、時間の確保や、メールなどの操作・練習のためのICTを活用した活動の充実を図る。

(ウ)の指導に当たっては、必要な人物、場所、活動などを描写する基本的な語彙や表現に親しむ機会を、「聞くこと」、「読むこと」及び「話すこと」の活動を通して多く与え、それらを「書くこと」の活動につなげていく指導を行う。また、「書いて伝える」ことに対する意欲を高め、求められている内容を適切にまとめよく書くための工夫について指導する。

(エ)については、聞いたり読んだりして理解し、それを基に思考・判断したことについて、自分の考えや気持ちなどを主体的に伝え合う言語活動を設け、その発話内容を整理しながら書くといった領域間の統合を図るようにする。

○ 言語の働きに関して変更, 追加された事項

ア 言語の使用場面

「(イ) 特有の表現がよく使われる場面」における「電話での対応 (変更)」,
「手紙や電子メールのやり取り (追加)」

イ 言語の働きの例

「(ア) コミュニケーションを円滑にする」における「話し掛ける (変更)」

「(イ) 気持ちを伝える」における「歓迎する (追加)」

「(ウ) 事実・情報を伝える (「事実」を追加)」

「(エ) 相手の行動を促す」における「命令する (追加)」

4 指導計画の作成と内容の取扱いで特に配慮すべきことは何か。

(1) 指導計画の作成上の配慮事項

- ・ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に向けて, 目的や場面, 状況などを意識し自然なコミュニケーションを意識した活動を考えるとともに, 五つの領域にわたる活動をできるだけ有機的に関連させながら指導計画を考えるようにする。
- ・ 領域別の目標と関連付けられた学習到達目標を設定する。
- ・ 言語活動は, 「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなど」の活動を基本として考え, 生徒が言語活動の目的や言語の使用場面を意識して行うことができるようにする。
- ・ 第1学年においては, 特に, 小学校における内容, 指導等の実態や生徒の興味・関心等を十分に踏まえるとともに, 時間割編成, 指導体制等を把握することにより, 中学校への円滑な接続を図る。
- ・ 言語活動において積極的に英語を使って取り組めるよう, まず教師自身がコミュニケーションの手段として英語を使う姿勢と態度を行動で示していくようにする。
- ・ 他教科等での学習内容を積極的に活用するなど, カリキュラム・マネジメントの視点から, 教科等間で学びのつながりや広がりがあるものとなるよう工夫を行う。
- ・ 障害のある生徒などの指導に当たっては, 個々の生徒の困難さに応じた指導内容や指導方法を工夫する。

(2) 内容の取扱い

- ・ 言語材料の取扱いについては, 生徒の発達の段階や学習目的に鑑み, それぞれの言語材料をどの程度まで習得させる必要があるのかを見極める。また, 理解のしやすさや, 表現する際の使いやすさといった使用側面, 「言語の使用場面」や「言語の働き」の点から, その言語材料の活用頻度や活用のしやすさなどに配慮する。
- ・ 発音と綴りの基本的な対応関係については, ある程度単語の綴りとその発音になじんだところで, 単純なものから徐々に指導していく。
- ・ 関連のある文法事項についてはより大きく分類して整理して理解させる。
- ・ 文法は, その伝える内容や目的, 場面, 状況といったことと密接に関連させ, 効果的な導入, 指導, 練習方法を工夫する。コミュニケーションの目的を達成する上で, いかに文法が使われているかに着目させて, 生徒の気づきを促す指導を行う。
- ・ 豊富な例文に触れていく中で, 次第に発信的使用へと発展していくような配慮を行う。例文を提示する際は十分な量を確保することに努めるだけでなく, 生徒が自分自身との関連性を感じられる意味内容のある例文を示していくようにする。
- ・ 辞書活用の指導に当たっては, 聞いたり読んだりする中で, 必要な情報を調べる態度と能力を身に付けさせていくようにする。
- ・ ペア・ワークやグループ・ワークを行う際は, 相互理解を深められるような題材や活動の在り方を工夫する。その際, やり取りや即興性のある活動を取り入れることで, コミュニケーションの広がりや深まりを感じられるような活動の工夫を行う。
- ・ 視聴覚教材等は, 教師がコミュニケーションの手段として英語を積極的に使ってコミュニケーションを行い, それを補い助けるものとして活用するようにする。
- ・ 各単元や各時間の指導の際は, 学習到達目標を踏まえ, コミュニケーションを行う目的や場面, 状況などを意識して学習に臨むことができるよう, どのような言語

活動を行うのかを明確に示すことにより、生徒自らが学習の見通しを立て、主体的に学習に取り組み、言語活動の質の高まりによる自分の考えの変容について、自ら学習のまとめを行ったり、振り返りを行ったりするようにする。

5 移行措置への対応はどうするか。

平成30年度から平成32年度までの第1学年から第3学年までの外国語の指導に当たっては、現行中学校学習指導要領第2章第9節の規定にかかわらず、その全部又は一部について新中学校学習指導要領第2章第9節の規定によることができる。移行措置の基本方針並びに、新学習指導要領の趣旨を十分に踏まえるようにする。また、小学校において、平成30年度から取り扱われる内容を踏まえ、平成33年度の全面実施に向けて計画的に指導を行うようにする。

6 評価規準はどのように作成するのか。

外国語科の学習評価は、「内容のまとまりごとの評価規準」に照らして行う。外国語科における「内容のまとまり」とは、学習指導要領の英語の目標として示される五つの領域のことである。

(1) 学年ごとの目標と評価規準

五つの領域別の目標の記述は、資質・能力の三つの柱を総合的に育成する観点から、各々を三つの柱に分けずに一文ずつの能力記述文で示している。学習指導要領では、学年ごとの目標は各学校において設定することとしているため、各学校においては、外国語科の目標、「内容のまとまりごとの評価規準等」に基づき、生徒の実態等に応じて、「学年ごとの目標」を設定する必要がある。

五つの領域別の「学年ごとの目標」は、一文の能力記述文で示すことが基本的な形となる。一方で、「学年ごとの目標」に対応する評価規準は「内容のまとまりごとの評価規準」を踏まえて、3観点で記述する。

【第3学年 内容のまとまりごとの評価規準（話すこと【やり取り】）】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
英語の特徴やきまりに関する事項を理解している。[知識] 実際のコミュニケーションにおいて、日常的な話題や社会的な話題などについて、事実や自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて伝え合う技能を身に付けている。[技能]	コミュニケーションを行う目的、場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて、伝え合っている。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、話し手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてやり取りしようとしている。

(2) 単元ごとの評価規準

単元ごとの評価に当たっては、(1)の考え方に基づいて評価規準を設定する。

【単元ごとの評価規準例（話すこと【やり取り】イ）】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<u>助動詞canや疑問詞whenを用いた文の構造</u> （言語材料）を理解している。 [知識] <u>町や地域</u> （話題）について、 <u>事実や自分の考え、気持ちなど</u> （内容）を整理し、 <u>助動詞canや疑問詞whenなどの簡単な語句や文</u> （言語材料）を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりする技能を身に付けている。[技能]	<u>外国の人に「行ってみたい」と思ってもらえるように</u> （目的等）、 <u>町や地域</u> （話題）について、 <u>事実や自分の考え、気持ちなど</u> （内容）を整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりしている。	<u>外国の人に「行ってみたい」と思ってもらえるように</u> （目的等）、 <u>町や地域</u> （話題）について、 <u>事実や自分の考え、気持ちなど</u> （内容）を整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりしようとしている。

※ 言語活動への取組に関して見通しを立てたり振り返りして自らの学習を自覚的に捉えている様子については、特定の領域・単元だけでなく、年間を通じて評価する。